

「土砂災害を我が事として」

青森県 八戸市立豊崎中学校 3年 ^{うえむら}上村 ^{りく}陸

平成二十九年七月、九州を記録的豪雨が襲った。特に九州北部は甚大な被害を受け、炎天下、行方不明者の捜索活動や復旧のための工事が続けられた。多くの人々が住む場所を失い、財産を流され、最愛の家族までもこの豪雨によって奪われた。

福岡県朝倉市付近の七月六日午前零時までの二十四時間の雨量は約千ミリに達し、観測史上最高を記録した。一時間の最大雨量は百二十ミリ。十五ミリでザーザーと降るような感じなので、想像のつかないような大雨だったことが推測される。これらの大雨には地球温暖化による海水温の上昇の影響があるのではないかと僕は考えた。

モンスター台風やゲリラ豪雨による洪水などの被害が頻繁に起こっている。世界では、極地の氷河、氷床の融解、それによる海面上昇で南太平洋の島々が海に沈み始めている。地球温暖化の影響によって、僕たちは厳しい現実を突きつけられているのだ。

豪雨は多くの二次災害を発生させる。河川の氾濫や土砂崩れなどがその典型だ。九州北部豪雨ではその両方が発生している。死者三十四人。土砂崩れに巻き込まれた人も多い。

土砂崩れの要因の一つに過疎化がある。「過疎化の進展、地域活力の低下は、特に水源地域や中山間地域など上流域において、間伐、除伐等の手入れが行き届かない森林や棚田等の耕作放棄地の増加等は、地域の災害ポテンシャルの増加をまねき、土砂流出の観点から国土保全上問題がある。」（安全で美しい国土づくりに向けて～21世紀型土砂災害対策の推進～ 国土交通省）との資料もある。

過疎化は日本全国で起こっている問題だ。実際、僕の住んでいる地域は山に囲まれ、田園風景が広がっているが、田んぼの殆どは、高齢者の方が手入れをしている。さらに学区の小学校では複式学級が設けられるほど過疎化は進んでいる。

土砂崩れは、河川の氾濫にも影響している。土砂崩れによって流れてきた木が川に入り、橋にぶつかって留まり、水をせき止め、氾濫が起こった例もある。

ここまで土砂災害について書いてきたが、僕自身、土砂災害と隣合わせで生活している。一九六八年、三陸沖北部で十勝沖地震が発生した。震度は五、マグニチュード七・九の地震だった。僕の祖父は当時高校生で、家業の牧場を継ぐため、親元を離れ北海道の高校に進学していたが、十勝沖地震の被害を聞いた担任から「青森の被害がひどいらしい。家族に会いに行っておきなさい。」と声をかけられ故郷の青森県八戸市に帰ったそうだ。

八戸で祖父が目にしたのはまさに惨状だった。道路はひび割れ、当時運行していた南部縦貫鉄道の線路は崩れ、復旧ができないほどだった。そのため、移動手段はバスしかなかったが、そのバスも道路が不通となり、迂回を強いられた。今なら車で一〇分足らずの道のりを四時間程もかかってようやく家にたどりついたという。その間の祖父の心配はいかばかりであったろう。

帰り着いた祖父の目に映ったのは土砂崩れによってつぶされた我が家だった。屋根が崩れ落ち、床は抜け、屋根の穴からは雨水が滴り落ちたという。大雨と地震によって、家の裏山が崩れたのだ。

それ以後、僕達家族は大雨や大きな地震のたびに不安な気持ちにさせられている。現在僕の家のある場所は土砂災害特別警戒区域に指定されている。

土砂災害などの自然災害は他人事だと思っている人もいるかもしれないが、多くの人々の身の回りに起こりうることだと知ってほしい。過疎化は全国各地で起こっている。さらに地球温暖化は世界規模の問題だ。

それならやはり、一人ひとりが土砂災害に備え、自らと家族の命を守るための手立てをもっていなければならないのではないだろうか。さらに、根本的解決のために、「自分が」という意識をもって行動するべきだ。

実際の被害に遭ってから、「若者がいないから」「最近の異常気象のせい」と嘆いてみても、何も戻っては来ない。そうならないためにも、非常災害時用の持ち出し袋の準備、家族の避難場所決めておくこと等普段からの備えが不可欠だ。

地球温暖化についても、僕たちは二酸化炭素の排出量を減らすことに真剣に取り組む必要がある。一人では何も変わらないと思う人も大勢いるだろう。しかし、行動する人が増えれば、触発される人も増える。それが日本中に広がれば、世界に影響を与えることだってできるのだ。

まずは、行動することから始めよう。これから買い物という人は、出発前にタンスからマイバックを出し、持って出かけてほしい。できることを始める。それが第一歩なのだ。